TADOKU JUNIOR　ビアトリクス・ポターのおはなし　★★★☆☆ ふつう　792語

The Tale of Mr. Jeremy Fisher

ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし

Beatrix Potter（1906年の本）　**原文そのまま**　朗読：retswerb

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　カエルのジェレミー・フィッシャーどんは、雨の日に小魚をつりに出かけます。なかなかつれないうちに、とんでもないことが……。

Once upon a time there was a frog called Mr. Jeremy Fisher; he lived in a little damp house amongst the buttercups at the edge of a pond.

The water was all slippy-sloppy in the larder and in the back passage.

But Mr. Jeremy liked getting his feet wet; nobody ever scolded him, and he never caught a cold!





He was quite pleased when he looked out and saw large drops of rain, splashing in the pond—

"I will get some worms and go fishing and catch a dish of minnows for my dinner," said Mr. Jeremy Fisher. "If I catch more than five fish, I will invite my friends Mr. Alderman Ptolemy Tortoise and Sir Isaac Newton. The Alderman, however, eats salad."

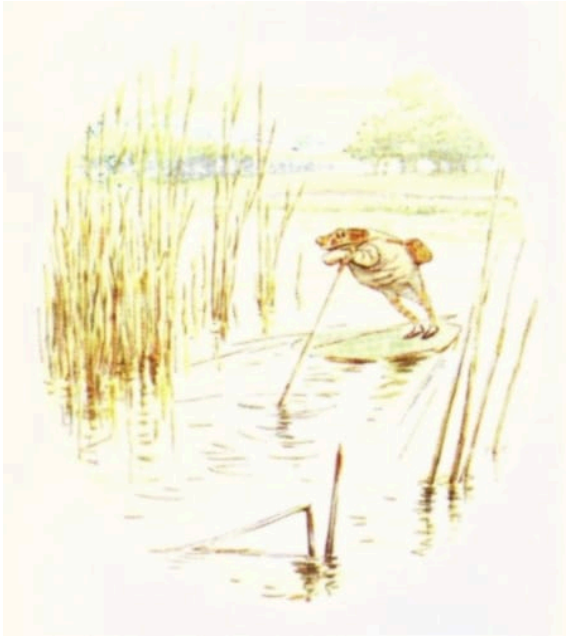




Mr. Jeremy put on a macintosh, and a pair of shiny goloshes; he took his rod and basket, and set off with enormous hops to the place where he kept his boat.

The boat was round and green, and very like the other lily-leaves. It was tied to a water-plant in the middle of the pond.





Mr. Jeremy took a reed pole, and pushed the boat out into open water. "I know a good place for minnows," said Mr. Jeremy Fisher.

Mr. Jeremy stuck his pole into the mud and fastened the boat to it.

Then he settled himself cross-legged and arranged his fishing tackle. He had the dearest little red float. His rod was a tough stalk of grass, his line was a fine long white horse-hair, and he tied a little wriggling worm at the end.





The rain trickled down his back, and for nearly an hour he stared at the float.

"This is getting tiresome, I think I should like some lunch," said Mr. Jeremy Fisher.

He punted back again amongst the water-plants, and took some lunch out of his basket.

"I will eat a butterfly sandwich, and wait till the shower is over," said Mr. Jeremy Fisher.





A great big water-beetle came up underneath the lily leaf and tweaked the toe of one of his goloshes.

Mr. Jeremy crossed his legs up shorter, out of reach, and went on eating his sandwich.

Once or twice something moved about with a rustle and a splash amongst the rushes at the side of the pond.

"I trust that is not a rat," said Mr. Jeremy Fisher; "I think I had better get away from here."





Mr. Jeremy shoved the boat out again a little way, and dropped in the bait. There was a bite almost directly; the float gave a tremendous bobbit!

"A minnow! a minnow! I have him by the nose!" cried Mr. Jeremy Fisher, jerking up his rod.

But what a horrible surprise! Instead of a smooth fat minnow, Mr. Jeremy landed little Jack Sharp the stickleback, covered with spines!





The stickleback floundered about the boat, pricking and snapping until he was quite out of breath. Then he jumped back into the water.

And a shoal of other little fishes put their heads out, and laughed at Mr. Jeremy Fisher.





And while Mr. Jeremy sat disconsolately on the edge of his boat—sucking his sore fingers and peering down into the water—a much worse thing happened; a really frightful thing it would have been, if Mr. Jeremy had not been wearing a macintosh!

A great big enormous trout came up—ker-pflop-p-p-p! with a splash—and it seized Mr. Jeremy with a snap, "Ow! Ow! Ow!"—and then it turned and dived down to the bottom of the pond!





But the trout was so displeased with the taste of the macintosh, that in less than half a minute it spat him out again; and the only thing it swallowed was Mr. Jeremy's goloshes.

Mr. Jeremy bounced up to the surface of the water, like a cork and the bubbles out of a soda water bottle; and he swam with all his might to the edge of the pond.





He scrambled out on the first bank he came to, and he hopped home across the meadow with his macintosh all in tatters.

"What a mercy that was not a pike!" said Mr. Jeremy Fisher. "I have lost my rod and basket; but it does not much matter, for I am sure I should never have dared to go fishing again!"





He put some sticking plaster on his fingers, and his friends both came to dinner. He could not offer them fish, but he had something else in his larder.

Sir Isaac Newton wore his black and gold waistcoat,



And Mr. Alderman Ptolemy Tortoise brought a salad with him in a string bag.





And instead of a nice dish of minnows—they had a roasted grasshopper with lady-bird sauce; which frogs consider a beautiful treat; but I think it must have been nasty!

むかしむかし、ジェレミー・フィッシャーどんというカエルがいました。池のほとりの、キンポウゲの花の中にある、小さなじめじめした家にすんでいました。

食りょう部屋にも、うらの通路にも、水がびちゃびちゃたまっていました。

でもジェレミーどんは、足がぬれるのが大すきでした。だれにもしかられませんでしたし、かぜをひくこともありませんでした！

外を見ると、大きな雨つぶが池にぴちゃぴちゃはねていたので、ジェレミーどんは大よろこびでした。

「ミミズをとってきて、魚つりに行こう。夕ごはんに、小魚をお皿いっぱいつろう」と、ジェレミー・フィッシャーどんは言いました。「五ひきより多くつれたら、友だちのプトレマイオス・トータス市会ぎいんさんと、アイザック・ニュートンきょうをまねこう。でも、ぎいんさんはサラダを食べるんだけどね。」

ジェレミーどんは、レインコートを着て、ぴかぴかのゴムのオーバーシューズをはきました。そして、つりざおとかごを持って、ボートをおいてあるところまで、大きくぴょーん、ぴょーんととんでいきました。

ボートはまるくてみどり色で、ほかのスイレンの葉っぱにそっくりでした。ボートは、池のまん中の水草につないでありました。

ジェレミーどんは、アシのさおを持って、ボートをおして広い水の上へこぎ出しました。「小魚がよくつれる場所を知っているんだ」と、ジェレミー・フィッシャーどんは言いました。

ジェレミーどんは、さおをどろの中につきさして、ボートをそれにつなぎました。

それから、あぐらをかいてすわり、つりの道具をととのえました。それはそれはかわいい、小さな赤いうきを持っていました。つりざおはじょうぶな草のくきで、つり糸は細くて長い白い馬の毛でした。そして、そのさきに小さなくねくね動くミミズをむすびつけました。

雨がせなかをつたって流れ、一時間近くも、ジェレミーどんはうきをじっと見つめていました。

「たいくつになってきたぞ。お昼ごはんにしようかな」と、ジェレミー・フィッシャーどんは言いました。

ジェレミーどんは、さおでボートをおして水草の中へもどり、かごからお昼ごはんをとり出しました。

「チョウのサンドイッチを食べて、にわか雨がやむのをまとう」と、ジェレミー・フィッシャーどんは言いました。

大きな大きなゲンゴロウが、スイレンの葉の下から上がってきて、オーバーシューズのつまさきをきゅっとひっぱりました。

ジェレミーどんは、とどかないように足をもっと小さくくんで、サンドイッチを食べつづけました。

一、二度、池のはしのイグサの中で、何かがガサガサ、バシャッと動きました。

「ネズミじゃないといいけど」と、ジェレミー・フィッシャーどんは言いました。「ここからはなれたほうがよさそうだ。」

ジェレミーどんは、またボートを少しおし出して、えさを水に入れました。すぐに、魚がくいつきました。うきが、ぐいっと大きくしずみました！

「小魚だ！小魚だ！鼻をつかまえたぞ！」と、ジェレミー・フィッシャーどんはさけんで、つりざおをぐいっと上げました。

ところが、なんということでしょう！つれたのは、つるつるの太った小魚ではなく、トゲだらけのトゲウオの、ジャック・シャープでした！

トゲウオはボートの中でじたばたあばれ、トゲでさしたり、かみついたりして、とうとういきが切れてしまいました。それから、ぴょんと水の中へとびこんでもどっていきました。

すると、ほかの小魚たちのむれが水から頭を出して、ジェレミー・フィッシャーどんをわらいました。

ジェレミーどんがしょんぼりとボートのふちにすわって、いたい指をしゃぶりながら水の中をのぞいていると、もっとひどいことが起こりました。もしジェレミーどんがレインコートを着ていなかったら、本当におそろしいことになっていたでしょう！

大きな大きな、とてつもなく大きなマスが――ザバーンッ！と水しぶきを上げて出てきて――パクッとジェレミーどんをくわえたのです。「いたい！いたい！いたい！」――それからマスはくるりと向きをかえて、池のそこまでもぐっていきました！

けれどもマスは、レインコートの味がとてもいやだったので、三十秒もしないうちに、ジェレミーどんをペッとはき出しました。マスがのみこんだのは、ジェレミーどんのオーバーシューズだけでした。

ジェレミーどんは、コルクのせんや、ソーダ水のびんから出るあわのように、ぽーんと水の上にうかび上がりました。そして、力いっぱい池のほとりまでおよいでいきました。

いちばん近くの土手によじのぼると、ぼろぼろになったレインコートのまま、野原をぴょんぴょんとんで家に帰りました。

「カワカマスじゃなくて、本当によかった！」と、ジェレミー・フィッシャーどんは言いました。「つりざおもかごもなくしてしまったけれど、まあ、かまわないさ。どうせもう二度と、魚つりに行く気にはなれないもの！」

ジェレミーどんは指にばんそうこうをはりました。そして、友だちは二人とも夕ごはんにやってきました。魚はごちそうできませんでしたが、食りょう部屋にはほかのものがありました。

アイザック・ニュートンきょうは、黒と金のチョッキを着てきました。

プトレマイオス・トータス市会ぎいんさんは、あみぶくろにサラダを入れて持ってきました。

そして、小魚のごちそうのかわりに、テントウムシのソースをかけたバッタのまるやきを食べました。カエルにとっては、すばらしいごちそうなのです。でも、わたしはきっとまずかったと思います！

たんご と クイズ　ジェレミー・フィッシャーどんのおはなし

frog カエル	**pond** 池	**rain** 雨
worms ミミズ	**boat** ボート	**sandwich** サンドイッチ
trout マス	**grasshopper** バッタ	

Q1 ジェレミーどんのボートは、何にそっくりでしたか？

① スイレンの葉っぱ　② 木のはこ　③ 大きな貝

Q2 ジェレミーどんが助かったのは、どうして？

① 友だちが助けたから　② マスがねむったから　③ マスがレインコートの味をいやがったから

Q3 夕ごはんに、みんなが食べたものは？

① 小魚のごちそう　② バッタのまるやき　③ チョウのサンドイッチ

こたえ

Q1　①　ボートはまるくてみどり色で、池にうかんでいるほかのスイレンの葉っぱに、そっくりでした。

Q2　③　マスはレインコートの味がいやで、すぐにジェレミーどんをはき出しました。のみこんだのはオーバーシューズだけでした。

Q3　②　小魚のごちそうは用意できなかったので、テントウムシのソースをかけたバッタのまるやきを食べました。カエルには大ごちそうです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #15077（Beatrix Potter、1906年）。パブリックドメイン。
挿絵：Beatrix Potter（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：retswerb（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。